

第三章 光の妖精ノラ

数日たった風が穏やかでよく晴れた日の午後、ポイプビーチの青空の下、黒光りするピアノがあった。赤いドレスを身にまとったノラの指先は黒と白の鍵盤けんばんの上で軽やかに踊り、背後はいごの風ないだ海の波なみの音を伴奏ばんそうにして美しい曲かなを奏かなでていた。そよ風は髪かみを靡なびかせ、髪の下にある繊細せんさいな顔かほを時々ときどき覗のぞかせた。その顔は美しく、非の打ち所がない。動きの一つ一つ